

13年ぶりに 不登校協力者会議が発足 文部科学省

2月10日に「不登校に関する調査研究協力者会議」（主査・森田洋司氏）が発足しました。この機関は、文部科学省の不登校政策の大枠を決める重要な役割を果たします。

1992年の会議（学校不適応対策調査研究協力者会議）では、「不登校はどの子にも起こりうるものである」という視点を初めて明らかにしました。これまで、不登校は子どもの性格や子育てに問題があるといったとらえ方をしていたので、当時としては画期的な内容でした。

2003年に出された会議（不登校問題

に関する調査研究協力者会議）では、「不登校はどの子にも起こりうる」という視点は残しながらも、「ただ待つことから早期対応へ」と路線を変更。それによって登校圧力が全国的に拡がりました。そして、今回の会議の発足となります。

主査は前回と同じ森田洋司氏であることや、文科省の論点例などみても、「不登校の早期発見・初期対応」「未然防止」の方向が示されると予想されます。しかし、一方で「不登校の子どもに味方がいることを伝えられる会議にしたい」という新しい意見も出されています。「発達障がい」「重大ないじめ」「貧困」等の新しいテーマも論議されます。

会議の中間まとめは、6月頃に発表の予定です。

親の 手記

「心を聴く」

一番星光

「休んでも良いよ」の言葉は、苦しい状況を解決するために言うのではありません。実感から生まれる言葉です

今から10年前のこと…。

登園しぶりをしていた娘の茜（仮名）が、本格的に学校に行けなくなったのは小学5年生の時です。「お腹が痛い」と小さな声で言いながら、ベッドから起きることができなくなりました。学校には、妻が毎朝欠席の連絡をしました。5日ほど休みが続いた時に、夕飯の食卓で妻が学校への不満を口にしました。

「先生って、いったいどうなってるん。5日休んでも何の連絡をしてこないんで。電話1本かけてこないよ。茜は、『先生から連絡あった？』って聞いてくるのに…。」

「教師にもいろんな事情やいろんな人がいるからなあ。」と返事をすると、ますます怒り始めました。「私たちみたいな自営業は、お客さんから連絡がなかったら、すぐにこっちから連絡をしたり、お客さんの所に行くよ。それは、信頼関係や仕事に直接結びつくから。はっきり言ってお金のためでもある。教師は、電話連絡をしても家庭訪問をしても、それで給料は変わることはない。でも…だからそういうことが尊いんじゃないん。お金のためでなくて子どものために仕事をするから『先生』って言われているんじゃないの？」静かな口調でしたが、その迫力と内容に「含蓄があるなあ。」と思って聞いていると、続けて語ります。

「教師は忙しい、忙しいって言われてるけど、休んだ子どもの所に行けないほど忙しいって、何にいったい忙しいん？忙しい中身がおかしいんじゃないん？」

その言葉は心にズシンと響きました。

娘からの「学校から明日の連絡はあった？」「先生から連絡はあった？」という質問に「な

かったよ。」と答えることしかできない母親。学校を休み続ける不安だけでなく、寂しそうな表情をみせる娘のこともかわいそうでならなかったと思います。

数日後の夜、担任の先生がやっと家庭訪問をしてくれました。娘は階段を下りてきて、玄関で話をしていました。少しうれしそうな表情でした。私は、軽い挨拶をして居間の方にいると、玄関からこれまで聞いたことのない妻の怒鳴る声が響いてきました。娘が部屋に戻ると、担任の先生は言ったそうです。「お母さん、あまり簡単に休ませていると、不登校になりますよ。」

その言葉に、妻は怒りで声が震えました。「茜が、毎朝どんなふうになっているか知っていますか。毎朝、あの子は苦しんでいるんですよ。簡単に休んでいません。子どもの状況を知りもしないで勝手なことを言わないでください！」

数日後、妻から「あなたも、少しは学校に欠席の連絡をしてよ。」と言われ、娘の部屋に向かいました。部屋のドアを開けると、カーテンが閉まっているからか薄暗い感じがしました。布団をかぶっている娘に声をかけました。「茜、朝だけけど…学校に行くんなら、起きんといけんよ。」

ちょっとして、「お腹が痛いから休む」と、消えるような声が布団の中から聞こえてきました。「わかった。ゆっくり休めよ。」と伝えると、突然娘が泣き出しました。「どうしたん？」と布団をゆっくりめくると、「このまま学校に行けなかったらどうなると思うん。中学にも行けんと思うし、高校にだって行けん。そしたら、私はどうなるん。『休んで良い』とか、勝手なことを言わんで！…明日学校に行ったら、友だちから『なんで休んだん？』って

聞かれるんよ。私は学校を休んでも何も解決せんよ。」

と、声をあげて泣きながら布団をかぶりしました。私は、その場に呆然と立ちすくみました。「お腹が痛くなるほど学校に行きたくないから、休むように言ったのに…どうして？」

どうすることもできずに、娘の背中を布団の上からさすりました。泣いている体の震えが、布団を通して十分に手に伝わってきました。苦しむ心が伝わってきて、私も締めつけられるようで、たまらなくなりました。

「将来のことが気になって苦しいなあ。でも、今日は休もう。学校に行こうとしたら、茜の心が壊れてしまうぞ。」

私の声も涙で震えました。

娘は、やっと納得して休んでくれました。やがて、休んだ日は大好きなピアノを弾いたり、クッキーを焼いたりするようになりました。

今ふり返ってみると、最初にかけた「ゆっくり休めよ」の言葉は、娘のために言ったのではなくて、自分が楽になりたくて言った言葉だったと思います。苦しそうな娘をこれ以上見るのがつらくて、「休めば良い」と言ったのだと思います。苦しむ子どもを見たくなくて、その状況を早く解決することで、自分が楽になりたかったのだと思います。だから、娘の心には届くはずもない…。

解決を急ぐあまりに娘の「心を聴きとる」ことをしようとしなかった点では、「簡単に休ませていると不登校になりますよ」と言った担任と、「ゆっくり休めよ」と言った私はそれほど変わりはないのかもしれない。

親は「学校を休んでも良いよ」と言う時は、「これほど苦しんでいるのに、学校に行く意味があるのか」「この子の幸せって？」「親とは何か」などを問い返すことが大切だと思いました。



変更する場合があります、
会報で必ず確認して下さい

○昼の大分例会…5月2日（土）13：00～16：30

○別府例会…5月2日（土）19：00～21：00

○豊後大野例会…5月7日（木）19：00～21：30

○津久見例会…5月8日（金）19：00～21：30

○夜の大分例会…5月15日（金）19：00～21：30

次号の会報発送作業予定日は、4月23日（木）です